

草筆木筆で描く不思議のらんたち

草画帖

56



丁
卯
九
号



董号です。

庭に咲きでたスミレ、

散歩で出会うスミレ、

いろんなスミレで描きました。

表紙はノジスミレ筆。

号名はアリアケスミレ筆。

写真はスミレです。

菫
咲
く
播
磨
か
な
し
き
郷くに
な
ら
む

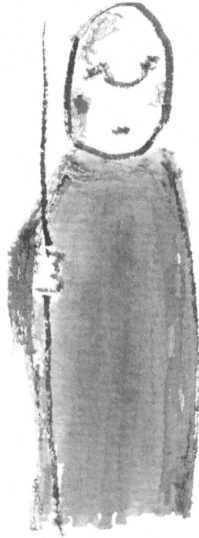


アリアケスマレ筆。

白董黄昏は物のあはれなり 碧梧桐



スマレ筆。
董摘めば小さき春のころかな 暁台



ニオイスミレ筆。
うつくしき道有世也すみれ草 蘭更



アリアケスマレ筆。独りで遊んで。独り慰む。

春の山

ひよっとして

春の女神

ギフチヨウは

この山に現れるのか

肺を心配しながら

坂径を一段

また一段

誘われるように登っていく

手引は藁

足元に

もう少し先に

もう少し上にと

可憐な姿を見せてくる

肺を休ませながら

このまま登るか

そろそろ下るか

思案していると

蕩けるように鶯が鳴く

生気をもらって

董を辿り

鶯を追う

こうして魔界に分け入るんだな

鏡花の世界を想いつつ

女神の山をさらに登る



ニオイスミレ筆。
一日スミレのように暮らして紫にたそがれる。



アリアケスミレの叢に分け入れば、
アリアケココロがしらしらと咲く。



風が吹いて、光が零れて、草木皆々よく笑う。



アメリカスミレサイシン筆。
風が吹いて、光が零れて、草木皆々よく笑う。



花
笑
う

アメリカスミレサイシン筆。
花を咲かせぬ草はない。心開かぬ人はない。



ノジスミレ筆。
菫ほどな小さき人に生れたし 漱石

草話

芭蕉の句と最初に出会ったのは、

山路来て何やらゆかしすみれ草

古池の蛙や名月の池もあつたが山路の葶が十歳にはしつくりきた。

*

雪国時代春先の庭を丹念に調べたことがある。ツメクサやハコベやノミノフスマといった小草を知り、それが雑草好きの始まり。

葶は五種類見つかつた。スマレ、シハイスマレ、タチツボスマレ、スマレサイシンで、あと一つはコスミレだつたか、ノジスマレだつたか。スマレ族はいまだに識別に手こずっている。

*

すみれ——というゆかしい名の女性を思い出す。青野ヶ原の病院に広島から療養に来ていた。体調の良い日に山を下りて、麓の祖母の家に水を求めて寄つた。気のいい祖母はそれから時々見舞に行つたが、本好きの娘さんに応えられなくて気の毒をしたと。それを聞いて文学少年は貧しい蔵書から何冊か選んで、彼女の病室を訪ねた。スマレのように嬾やかなひとだつた。

*

やはり昔の、もう一人の女性。

影ふかくすみれ色なるおへそかな

一九六四年来日したミロのヴィーナスを詠んだ、佐藤春夫の句。



豆の種

俳句 白山鳥翁 / 絵 艸々子 / 詩 泉井小太郎

草画帖 第56号 2023年4月30日 泉井小太郎編集 六角文庫発行
〒675-2312 兵庫県加西市北条町北条1039 Tel 0790-42-6008